

平成28年度 各種調査結果等を活用した学力向上の取組事例

事務所名	沿岸南部	学校名	陸前高田市立米崎小学校	TEL	0192-55-2957
------	------	-----	-------------	-----	--------------

確かな学力保障に向けた学校・地域における組織的取組

【今年度の目標】

- 1 各教科における正答率 50%未満の層を減少させる。(下位児童の底上げを図る。)
- 2 国語における「書くこと」の正答率を 10 ポイント以上上昇させる。(書く場面を充実させる。)
- 3 算数及び理科の正答率を対県比 100 以上にする。
- 4 質問紙「授業が分かる」と答える児童の割合を全教科で 80%以上にする。

【組織的な取組】

上記の4つの目標に迫るため、諸調査等の活用をCAPDサイクルに位置付け、課題把握とつまずきの原因究明、それに対する解決の手立ての検討をし、中学校区内各小中学校や家庭と運動しながら学校体制で取り組むこととした。

【活用する諸調査】

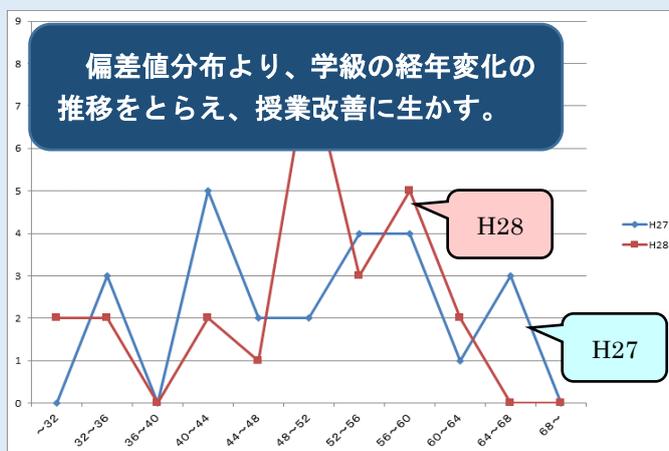
- ① 岩手県学習定着度状況調査 (10月)
 - ② 陸前高田市標準学力調査 (4月)
 - ア 平均正答率全国比 10 ポイント以上低い小問把握
 - イ 同一集団の偏差値分布の経年変化から学級集団の状況把握
 - ウ 前年比で平均正答率 10 ポイント以上低下した児童の把握 <イ・ウは資料1参照>
- <資料1> H28年度とH27年度の同一集団を比較した正答率の変化(左)と偏差値分布の変化(右)

昨年度の正答率	偏差値	今年度の正答率	偏差値
94.7	66.0	94.7	63.4
96.8	60.9	73.7	52.4
78.9	55.7	82.9	57.3
60.5	43.8	63.2	46.8
76.3	54.0	78.9	55.2
71.1	50.7	68.4	49.6
63.2	45.5	71.1	51.0
57.9	42.1	65.8	48.2
47.4	35.2	31.6	30.0

2年生～6年生までの児童一人一人の経年の変化をとらえ、個別の指導に生かす。

63.2	45.5	68.4	49.6
68.4	48.9	75.0	53.1
60.5	43.8	42.1	35.6
57.9	42.1	42.1	35.6
55.3	40.4	65.8	

は、昨年度より正答率が10%以上落ちた児童を示す



- ③ 全国学力・学習状況調査 (4月)
- ④ 岩手県新入生学習状況調査 (4月)



校内研修会において、諸調査の分析を行い、本校の課題とその取組を以下のとおり共有した。

【分析から見た課題】

- ・ 学力の二極化がみられる学年があること。
- ・ 国語に比べ、算数の力が弱いこと。
- ・ 記述式の問題での正答率が低く、設問にしたがって説明する力に課題があること。
- ・ 下位層の児童の底上げが必要であること。
- ・ メディアの視聴が多いこと。



課題に対する取組			
学力向上 授業改善	<ul style="list-style-type: none"> 「改善計画書」に基づく授業の実施 校内研究主題（算数）の取組 OJT 研修会をとおした授業力向上の取組 書く力を伸ばす意図的、計画的な指導の実施 「学力向上計画」の作成とそれをもとにした学力向上の時間の取組 補充指導の充実 	<ul style="list-style-type: none"> 「学びフェスト」「家庭学習の手引き」の配布 家庭学習振り返りカード ノーメディア週間 家庭、地域、中学校区の連携による指導 	家庭や地域との連携
	CAPDサイクルで取り組むようにする		

【具体的な取組】

1 授業改善を図るための取組

(1) 改善計画書に基づく授業

標準学力調査結果で正答率の低い問題が出題されている単元とのすり合わせ作業を行い、改善計画を作成した。また、教科書に付箋を貼り丁寧に指導を行うように共通理解を図った。

<改善計画書（例）>

3年「あまりのあるわり算」 4年「わり算のひっ算」		3年「大きい数のしくみ」	
問題	70 ÷ 9	問題	5兆を10でわった数
改善	・商のたつ位を確かめること。	改善	・位取り表を十分に活用して問題に取り組ませること。 ・「10でわる」「10倍する」の意味を正しくとらえさせること。

(2) 校内研究主題（算数科）の授業における取組

研究主題「伝え合う力を育む算数授業の在り方」

ア 学習過程の改善

つかむ・見とおす	既習事項の活用
解く	当該学年で身に付けさせるべき「算数的スキル」指導の徹底
学び合う	学習形態の工夫 定着の時間の確保 表現活動
まとめる	振り返り活動の重視

イ 考えを伝える学習形態の工夫

発達段階に応じて①～④を取り入れた学び合いを意識的に取り組む

- ①ペア学習 ②能動的ペア学習（説明する相手を自分で探して説明する）
③グループ学習（班グループ、同じ考えのグループなど） ④協同的な学び合い

ウ 振り返りを書かせる際の留意点

分かったこと、役に立った考えや方法、友だちから学んだこと、次がんばりたいこと、学習したことを生活の中に生かしたいこと等をノートに書かせる。

(3) OJT 研修会を行い、教員相互の自由な授業参観による授業力向上への取組

研修で学んだことを伝講したり日常実践していることを参観したりして、教員相互の学び合う場として、OJT 研修会を設定した。

《実施した伝講等研修内容》

外国語活動、ユニバーサルデザインの視点からの授業づくり研修 等

《実施した参観授業》

特別支援教育、算数（ICT活用を含む）、体育、学級活動（復興教育、性指導） 等

ア 指導案（単元名、ねらい、今日の授業のコンセプトのみ）

イ 事前研、事後研（授業に対して意見を書いた付箋を「今日の授業のコンセプト」ごとに貼り付け、職員室に掲示して意見交流を図る。）

〔体育における OJT 研修会実践例〕

第6学年 体育科学学習指導案
指導日時 平成28年9月21日（水）2校時
指導学級 6年生 男12名 女15名 計27名

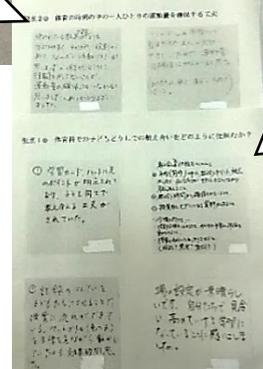
1 単元名 陸上運動「ハ
2 単元の目標と評価規準
3 単元の指導計画
4 本時の指導（3/6）
(1) 本時のねらい
空中姿勢に気をつけて、ハードルを走り越すことができる。

(2) 本時の計画

時間	活動内容・学習活動	支援の手立て（○）と評価の観点	準備・資料
導入 10分	1 準備運動 2 セットメニュー ・ミニハードルコース（3～5歩のリズム） ・ギャロップコース（踏み切り動作） ・ハードルコース（振り上げ足、抜き足の動作）	○軽く体をほぐさせる。 ○3種類の活動を通して、ハードル走の基礎感覚、基礎技能を習得させる。	・ミニハードル ・段ボール ・ハードル
展開	3 課題把握 空中姿勢に気をつけて、ハードルを走りこそう。	○前時までに学習した、ハードルをリズムカルに走り越すためのポイントを振り返りながら、本時の課題の視点を持たせる。 ○空中姿勢のポイントを確認する。	・学習カード
	4 グループ学習 ・第1ハードルまでの練習	○グループごとに役割を決めさせ、お互いにポイントを見合わせるようにする。	・学習カード ・ハードル



授業の視点
①体育科での子ども同士の教え合いをどのように仕組むか。
②体育の時間の中で一人一人の運動量を確保する工夫。



授業の視点ごとに付箋に感想・意見を書き込んでもらう。

(4) 「書くこと」の力を伸ばす指導

考えを述べる文章を書き慣れるように、学習の振り返りに考えを書かせたり、条件付の作文を書かせたりした。また、各教科、領域においても自分の考えを書く場を意図的・計画的に増やして、書くことのスキルを高めた。

(5) 下位層の児童の底上げを図る指導

ア 「学力向上改善計画」＜資料2＞をもとにした「学力向上の時間」における補充指導（年6回）
どの学級も複数の教員で協力指導ができるよう指導体制を整えて実施。下位層に対しては、「時間をかけて、できるまで」を基本に、根気強く指導した。
イ 漢字・計算チャレンジテスト

2週に1回実施。（全11回）「計画的な練習の積み上げ→テスト→事後の補充指導と定着に向けた取組」のサイクル化を図り、どの子にも漢字・計算の基礎的・基本的な力が身に付くように指導した。

＜資料2＞ 学力向上改善計画（6年）
校内研修の時間を使い、学年ごとに作成した計画を基に、年間6回指導を行う。

学力向上改善計画(6年)					
月	目	1年	2年	3年	4年
4	13	標準学力検査	標準学力検査		
	14	校内研究会(学力向上対策の計画提案①)		知能検査	知能検査
	19	全国学力・学習状況調査			全国学力・学習状況調査
6	2	校内研究会	通常学級における特別支援教育		
	9	校内研究会	標準学力検査の分析と考察・家庭学習実践交流会		
	23	学力向上の時間	OJT	OJT	
7	30	校内研究会	授業提案	授業提案	
	7	学力向上の時間	全国学力調査の落ち込みが見られた問題と類似問題(算数)		
	8	OJT	体育実技		
9	1	学力向上の時間	割合、図形の応用問題		
	21	学力向上の時間	割合、図形の応用問題		
	29	校内研究会	全国学調・中一テストの問題を解く。		

2 学力向上の基盤をつくるための取組

(1) 家庭・地域との連携

- ア 「学びフェスト」「家庭学習の手引き」の配布
子どもへの関わり方、家庭学習の意義や必要性、取組のポイント等を保護者に提示
- イ 授業と連動した宿題の提示とその評価・指導
- ウ 家庭音読への全学年での取組
- エ 「家庭学習の振り返りカード」による自分自身の取組の振り返り
- オ モデルとなる家庭学習ノートの掲示

(2) 中学校区の連携

ア 授業研究交流会の実施

中学校区内の校内研究会に全員一度は参加し、指導法を学び、自身の指導に生かす。

イ 中学校区4校による、共通実践目標を設定しての取組

- ・人の話をよく聞きましょう。
- ・挨拶、返事をしっかりしましょう。
- ・学習用具を忘れ物なくそろえましょう。

学習時間

メディア時間

ウ 学習規律の統一

研究主任会議で4校統一した学習規律を身に付けさせる。

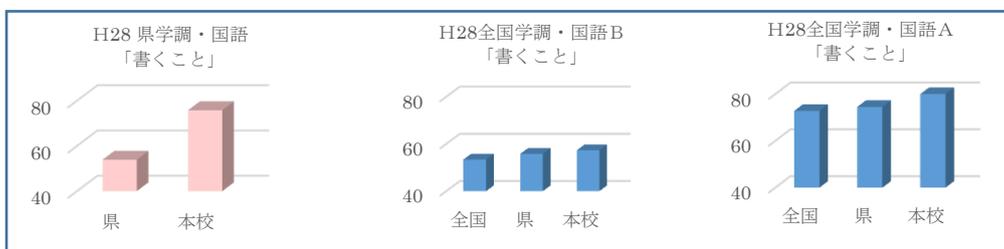
エ ノーメディア週間を設定しての取組 <資料3>

メディアから離れた学習時間の確保など、家庭における時間の使い方を見直すための取組を、中学校の定期テスト時期に合わせて年3回、中学校区4校同時に実施。

<資料3>

3 成果

- 岩手県学習定着度状況調査結果をみると、正答率 50%未満の層を減少させるには至らなかった。しかし、H28 年度全国学力・学習状況調査においては、国語A、B、算数Bにおいて、県平均正答率以上の児童の割合が、県比で2～8ポイント高くなった。更に精査してみると、国語においては、上位層が多く、個々の学力にばらつきが少ない傾向にある。算数においては、県平均正答率または全国平均正答率より低い、県や全国平均に近づきつつある。
- 各教科や領域、家庭学習等で書く場面を意図的・計画的に設定して取り組ませた結果、「書くこと」の領域の正答率が、岩手県学習定着度状況調査の県平均で21ポイント、全国学力学習状況調査の全国平均で2～7ポイント上回ることができた。



- 質問紙において「授業が分かる」と答える児童の割合について、同一集団を H27 年度岩手県学習定着度状況調査から H28 年度全国学力・学習状況調査にかけて経年変化を見ると、国語において92%の児童が肯定的な回答を継続して示し、算数においては、77%から 81.4%に上昇した。一方、H28 年度岩手県学習定着度状況調査においては、全教科において「授業が分かる」と答えた児童の割合が80%に達しなかった。また、それに連動して、算数及び理科の平均正答率も本年度の目標に達することができなかったことから、学習形態を工夫して授業を行うなどの手立てを速やかに講じ、取り組んでいる。
- 諸調査結果を受けて、落ち込みがみられた学習内容を取り上げて指導したことが、その単元を行う際の教師の準備や授業をよりねらいをもって行うことにつながり、更に、「学力向上の時間」の充実へとつなげることができた。
- 中学校区の連携をとおして、児童生徒の課題を共有し、中学校の教育目標を意識した学習指導を4校統一して行うことができています。中学校においては、関数領域に落ちが見られることから、小中接続を意識した比例、反比例の指導を行うことができた。高学年の児童においては、中学校に向けた自己の努力点が明確になり、意識して学習に取り組む姿がみられるようになってきている。